

序：特集にあたって

安部 彰

(龍谷大学／立命館大学生存学研究センター)

本特集は9月9日(土)に立命館大学朱雀キャンパスにて実施された研究企画「『正義・平等・責任』から／とともに生存をめぐる制度・政策についてかんがえる」をベースとしている。また以下の拙文は同企画における趣旨説明に内容・形式の点で必要な修正を施したものである。

はじめに

立命館大学生存学研究センター、通称「生存学」では、これまでもさまざまな合評会を研究企画の一環として実施してきましたが、今回とりあげる著作は、井上彰さんが先立つ2017年6月に満を持して上梓された『正義・平等・責任——平等主義的正義論の新たな展開』です。井上さんはその多産な仕事ぶりでも知られ、これが初の単著というのはたいへん意外な感じもしますが、このたび刊行後まだ日の浅い同書を取りあげた所以は、もちろん同書の有する大いなる意義にかかわっています。その意義とは、もちろん学術書としての意義と、さらに生存学における意義です。

1. 学術研究における意義

1-1. 普遍的な問題としての「平等」

まず専門研究者が本書を読めば、あるいはその目次に目をとすだけでも、この本が今後の研究において避けて通ることができない最重要著作であることは明々白々です。すなわち、第一に、本書では一切の無駄を排した明晰な文体のもとで透徹した論証が展開されています。のみならず、その問いの立て方もきわめて鋭利であり——哲学において多く、その問いはその答えよりも重要です——、今後とくに若手研究者のよきお手本ともなるでしょう。さらに、そのテーマおよび探究のスタイルにおいても本書は、専門をおなじくしない読者にとってもたいへん魅力あふれる著作となっています。

そこで、ここでは、本書の探究のスタイルの魅力を確認したいとおもいます。まずその魅力は、平等という普

遍的なテーマを扱っている点にもとめられます。我々は、ある事態や状況にかんして「これは平等なのか、そうではないのか」ということを、とても気にかけている存在です。また平等はそもそも比較にもとづく観点ですから、それは、我々が他者や他者との関係をとても気にかけているということでもあります。いいかえれば、独我論からは、そもそも平等への関心が出てくる余地はありません。しかし、我々は他者や他者との関係を気にせずはいられないとして、その関心はいかなる関心なのか。それは、「我々の関係はいかなる関係であるべきか」、「どのような条件を充たせば、その関係はのぞましいといえるのか」といった問いのかたちをとることに明らかのように、我々の平等への関心は自他の関係についての規範的な関心です。つまり、我々の平等への関心が露になるのは、日常的な道徳的判断(すなわち善悪・正不正の判断)においてである。たとえば、我々は貧困や格差の是非を云々しますが、その判断は我々の平等への関心から導かれているわけです。

1-2. 「平等」をいかに問うのか

さて、このように誰もが根強く抱いている平等への関心は、歴史的には、自由や自律といった、これまた普遍的なテーマや関心と絡みあいながら、政治的には現代リベラリズム、学術的にはリベラルな平等論へと結実していきます。とはいえ、研究史的には、リベラルな平等論の主な主戦場は、「なんの平等か」という問いをめぐる展開していくこととなります。すなわち「平等にすべき、その対象はなにか」という問いこそが平等論における中核的な問いとされたうえで、この問いにそれぞれ、ロールズであれば社会的基本財、ドゥオーキンであれば資源、センであればケイバビリティとのように答えてきたわけです。しかし本当は、この問いは論点先取です。というのは、「なんの平等か」という問いは平等が価値あるものであることを前提にしていますが、その手前には「なぜ平等なのか(なぜ平等にすべきなのか)」という問いがあるからです。したがって、この平等の価値をめぐる問いの答えが明らかでないと、じつは「なんの平等か」という

問いは根源的には問えない。いや、問うことじたいはできて、それでは平等論としては決定的に物足りない。それゆえ、本書で井上さんは「なぜ平等なのか」というこの根源的な課題に果敢に挑戦します。そしてこのように、当該研究分野における中核的な問いを問うスタンスこそ、本書の大きな魅力です。

さらに本書は、「なぜ平等なのか」をめぐる問いこそがじつは平等論研究の主戦場であることを、教えてくれます。つまり詳細な研究史を学べるのも本書の魅力であり、かつ井上さんはロールズ研究の第一人者としても知られていますが、本書において「平等主義的正義論はロールズとともに始まった」とする通説を糺し、ロールズを厳密に歴史化するその手つきに我々は却ってロールズへの大いなる愛を感じざるをえません。

では、井上さんじしんは「なぜ平等なのか」という問いにいかにか答えるのか。本書第4章では、その探究に邁進していくわけですが、それによって導かれる答えの評価については本特集において議論になるでしょうから、ここでは次の点を強調するにとどめます。すなわち私のみるところ、宇宙的平等にせよ、運の平等論へのコミットメントにせよ、そのベースには井上さんの直観がある。そして直観は往々にして公理化されがちですが、井上さんはそれを許さない。むしろ自らの直観の正体を執拗に分析し、その深奥にわけいって行く。したがって本書は、平等というそのテーマにかかわる魅力にとどまらず、分析哲学というその方法にかかわる魅力をも兼備しています。

2. 生存学における意義

まず私なりにパラフレーズすると、生存学の目的は、人間の多様な属性に応じた多様な善の構想のもとで営まれるその生と生き方の基盤を究明することです。そして生存学は、かかる究明を「生存をめぐる制度・政策」の研究として推進しています。周知のように、井上さんは昨年度まで生存学研究センターの中核メンバーとして同研究プロジェクトの牽引役を担ってこられました。またその研究プロジェクトを意欲的に推進してきたのが、本書のあとがきにもでてくる「規範×秩序研究会」です。

かくして、規範×秩序研究会のメンバーは生存学における井上さんの研究の意義をふかく理解し、またその恩恵にも大いにあずかってきました。しかし、おなじことが生存学全体にあてはまるかといえば、必ずしもそうとはいえないのではないかと。これが私の率直な印象であり、

かつそのことを私はきわめて残念にもおもってきました。しかし本書をつうじてあらためて確信したのは、井上さんの研究はやはり「生存をめぐる制度・政策」の中核をなすという事実です。なぜなら、平等や正義はそのような制度・政策の基底をなす価値・理念にほかならず、本書はまさにそれを探究し、詳らかにする研究だからです。

3. コメンテーターについて

では、本日のコメンテーターをご紹介します。まず角崎洋平さんは政治哲学と福祉社会学がご専門で、そのアプローチは理論研究・歴史研究・実証研究と非常に多岐にわたっています。またその政治哲学研究において、井上さんも本書で今後の重要な研究課題と位置づけている、異時点間の平等論の研究にもとりくんでおられます。その主な成果としては、「平等主義の時間射程——デニス・マッカーリーの「いつの平等か」論の意義と限界」(『政治思想研究』第18号、印刷中)をぜひご覧ください。

また堀田義太郎さんは政治哲学・倫理学がご専門で、生命・医療倫理学の分野でも重要な業績をのこしておられますが、いまや日本における哲学的差別論研究の第一人者でもあります。その主な成果としては、「差別の規範理論——差別の悪の根拠に関する検討」(『社会と倫理』第29号、pp. 93-109)、「何が差別を悪くするのか——不利益説の批判的検討」(『倫理学年報』第65集、pp. 279-292)をぜひご覧いただきたいのですが、差別についてかんがえることはいまでもなく正義や平等についてかんがえることでもあります。したがって堀田さんは、異なるラインからのアプローチではあるけれど、井上さんと同じ問題関をもって研究を進められてきたわけで、その点でふたりは同志と呼べる関係にあるといえます。

4. むすびにかえて

さいごに、本書における井上さんの平等の探究は、よい意味で禁欲的な理論的探究であり、その実践的な含意をいかに汲みとり、応用に活かすかは権利上万人の探究に委ねられています。もちろん、そのような実践・応用的な探究は本書のさいごで触れられているように井上さんじしんの課題でもあり、そのことはこのかん井上さんが無知のヴェール実験などの共同研究に意欲的にとりくんでおられることにも明らかです。しかしその探究は、述べてきたように生存学の中核的な課題と重なるがゆえ

に、我々生存学のメンバーも今後はそれぞれの研究を本書に鑲められた豊かな示唆に血肉をあたえつつ展開していく責務を負わねばならないでしょう。

